特別講演

「これからのいんば沼、そして酒々井町」

酒々井の昔と未来

～千年のまちづくり～

酒々井町長　小　坂　泰　久

中川の景　三代目広重画「成田土産名所尽」

いんば沼フォーラム in しすい

平成23年10月15日

～小坂町長　特別講演の内容～

ただ今、写真家の川島俊彦先生から「かつての印旛沼　そして酒々井」というたいへん貴重な写真記録を拝見させていただきました。酒々井の昔を偲び、大変感動いたしました。

私からは、「これからのいんば沼、そして酒々井町」。サブタイトルとしまして、「酒々井の昔と未来～千年のまちづくり～」ということで、お話をさせていただきます。

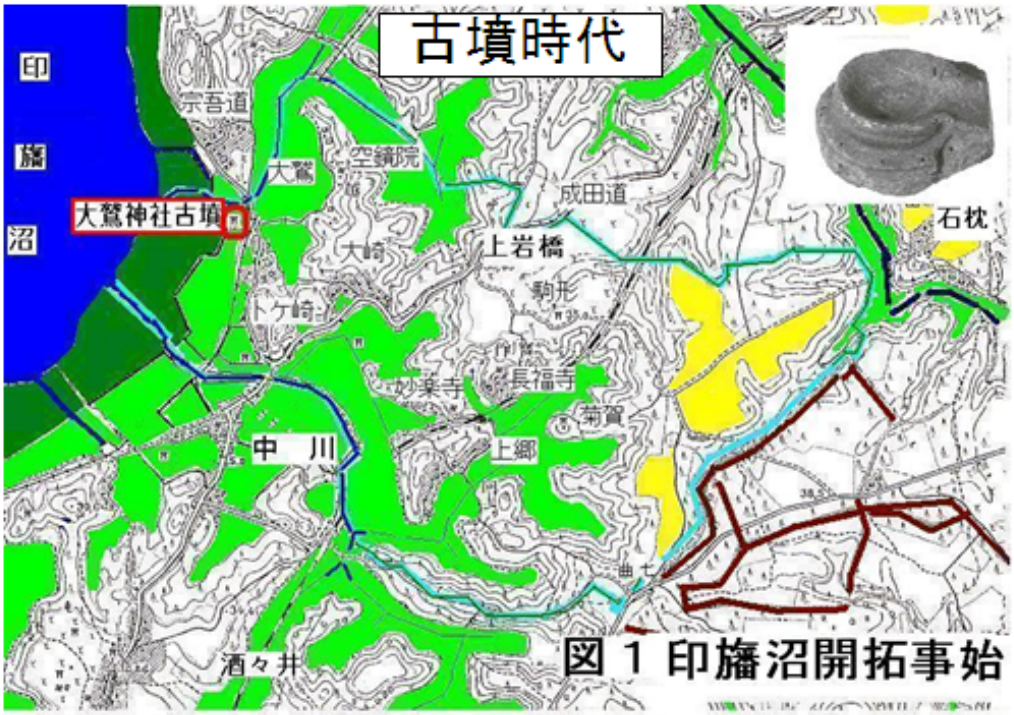
お話の前段として、町の歴史を振り返ってみたいと思います。

図１　印旛沼開拓事始

印旛沼に面する大鷲神社古墳　直径３０ｍ　高さ３ｍ　、古墳時代中期５世紀後半の古墳、千葉県北部、総の国に特徴的な「石枕」が出土しました。

高台に位置する一般的な古墳と異なり低湿地に立地し、その位置は沼の氾濫源と谷津田の接点、近世の印旛沼の堤防に重なります。

印旛沼の湿地を水田に開拓した古代豪族の奥津（おくつき）城は古事記の「豊葦原の瑞穂の国」の風景を彷彿させます。



大鷲神社古墳　五世紀代　沼に面する低湿地に築かれた円墳　石枕が発見されている

図２　古代の海道と酒々井

７世紀後半、古代国家の成立に伴い、全国的に交通網が整備されました。

都と国府を結ぶ海道には駅が置かれ、国府と郡衙を結ぶ海道には伝馬（てんま）が置かれました。

酒々井は古東海道と国府への伝路（てんろ）、また印旛沼を利用した水路が交差していた古代交通の要衝でした。

図３　仏教信仰の広まり

新しい文化としての仏教の広がりは、海道を通じて伝わりました。

酒々井には７世紀半ばの横穴古墳（カンカンムロ）から仏具である「銅碗」が副葬品として出土しているほか、酒々井と隣接する長熊には７世紀後半の寺院「高岡寺」があります。

また、８世紀半ばの仏具「奈良二彩」碗、９世紀に土器に書かれた「仏」「寺」の文字、１０世紀の開かれた伝承を持つ寺院、１１世紀の銅製仏像（釈迦像）など古代を通じての仏教信仰の広がりが認めらます。

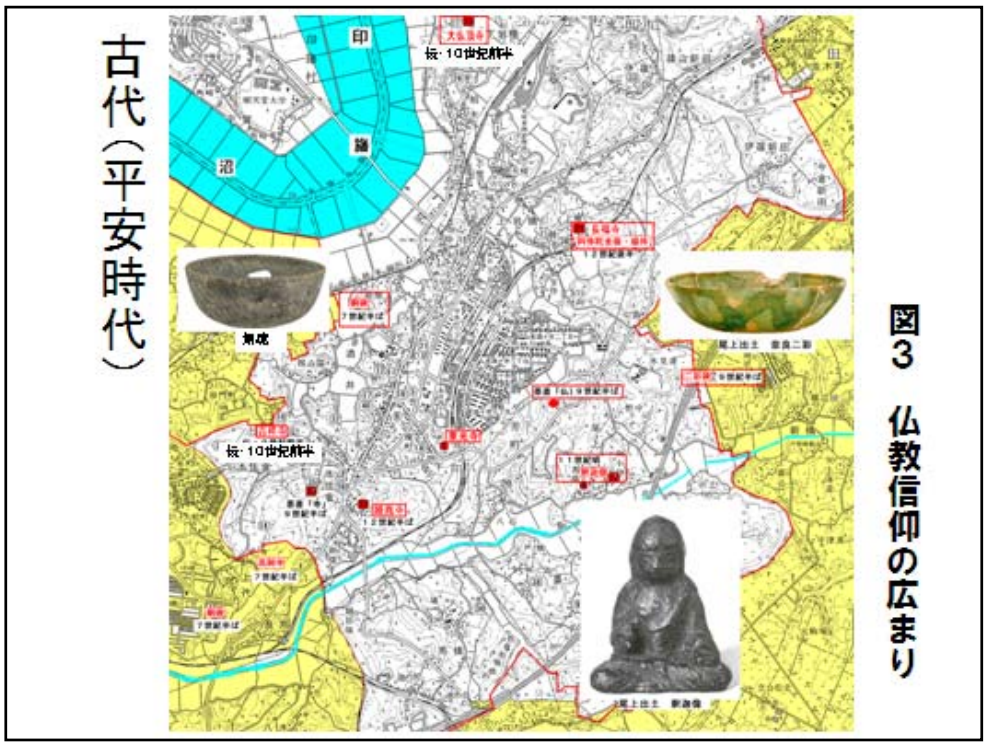


図４　印東荘（いんとうのしょう）（※）と酒々井

１１世紀、歴史の主役は武士に移ります、このころ酒々井の地は房総平氏「上総氏」が支配することとなります。

京都に残る古文書には酒々井と周辺に在住した有力者が書かれています。これによれば酒々井の地は印東荘と呼ばれ、上総平氏一族の平常澄が荘園の責任者で酒々井町の岩橋（石橋）には苅田（かった）成家、尾上（小上）には藤原弘里など各村々は古代からの有力者が村長（むらおさ）として地区を治めていたことがわかります。

岩橋の地には、このころ造られた「阿弥陀仏坐像」が現在に伝わっています。

※印東荘（いんとうのしょう）　酒々井、富里、佐倉、成田、八街の一部を含む地域

図５．１　本佐倉城と交通路

１５世紀前半、関東は戦国時代に入り、鎌倉以来の名門である千葉氏はその渦中で内紛が起こり、千葉の地を捨てて、陸と水の交通の要衝である酒々井に本拠を構えます。以後百余年にわたり酒々井は下総最大の大名千葉氏の城下として政治、軍事、文化の中心として栄えます。

千葉氏の居城、本佐倉城は当時、「佐倉の城」と呼ばれたことが図からわかります。

今の佐倉城は「鹿島の城」と書かれています。

図５．２　本佐倉村千葉家故城の図

幕末に書かれた「成田参詣記」には千葉氏の頃の屋敷名、事跡が記載されており往時を偲ぶことができます。

現在、本佐倉城は関東を代表する戦国時代の城郭として国史跡となっており、酒々井町と佐倉市が共同で整備計画を進めています。

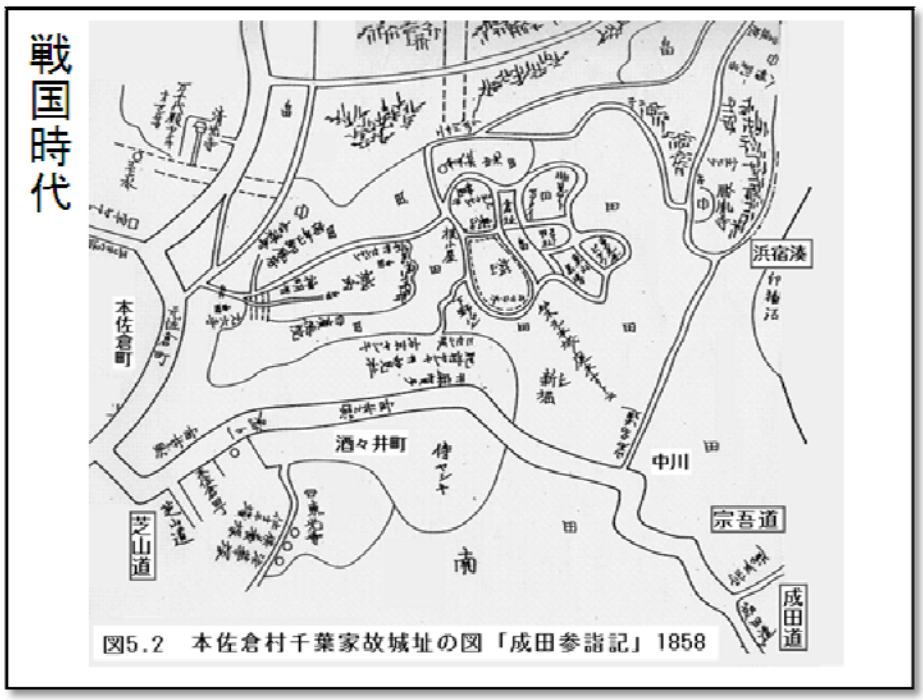


図６　江戸時代前半　元禄国絵図

元禄１５（1702)年に完成した元禄国絵図の下総国絵図の部分を拡大したものです。

酒々井から海道が分岐していることがわかります。

また、中川には木橋が架けられているのが描かれています。

元禄１４年（1701）９月、上岩橋村明細書には、中川板橋　長５間（約 9.1 m)、横(幅）９尺（約 2.7 m）と記載されています。

今よりも中川の川幅は広かったことがわかります。

図６　江戸時代前半 **元禄国絵図　下総酒々井部分**

明和８年（1771)、沼での藻草、海老、魚、鳥猟(漁)について、幕府より沼べりの４６ヶ村余に御裁許があり、印旛沼の恵みが保障されたという記録が残っています。

図７　印旛沼水路と交通路

古墳時代から明治まで水運利用がされていました。

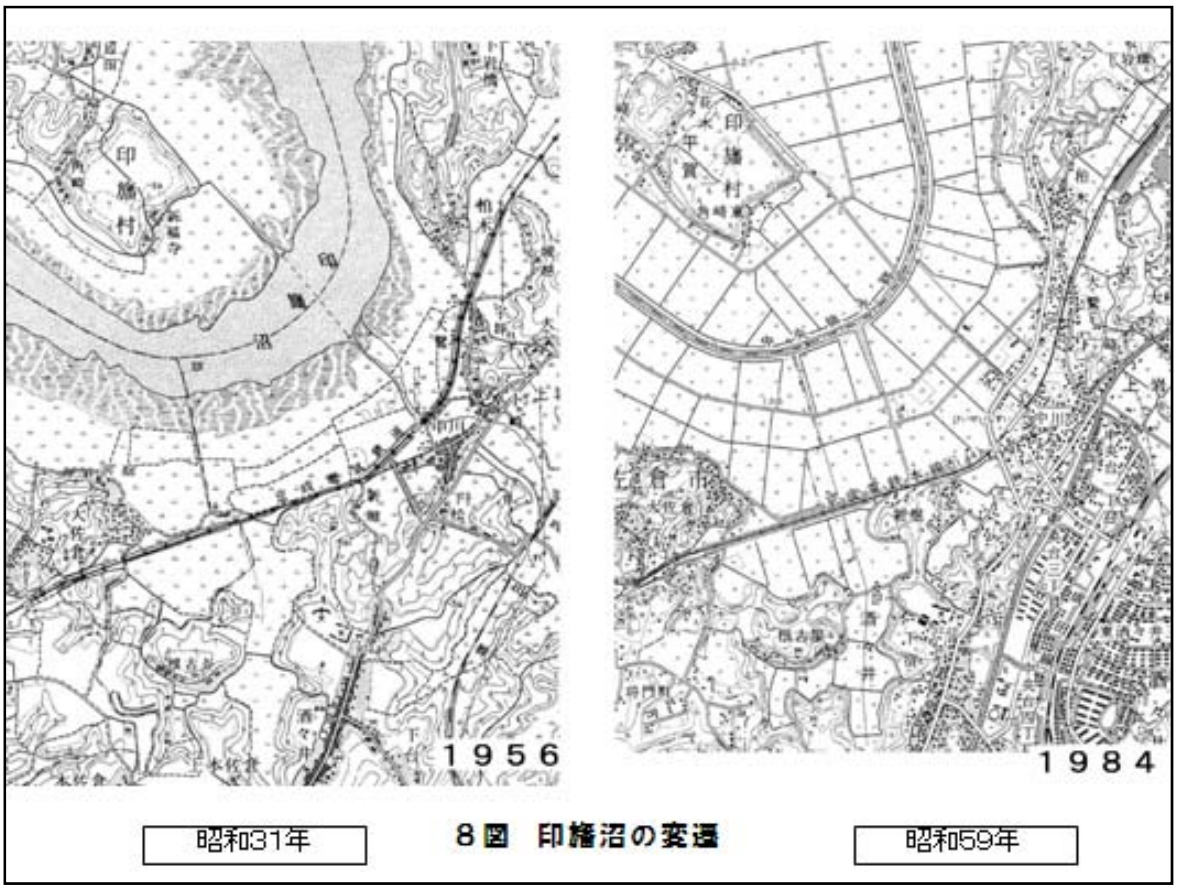
明治後期の様相、印旛沼には沼を縦断し利根川にいたる高瀬船・渡し船航路と対岸を横断する数多くの渡しがありました。

鉄道が重量物・大量輸送を担うまで沼は重要な交通路でした。

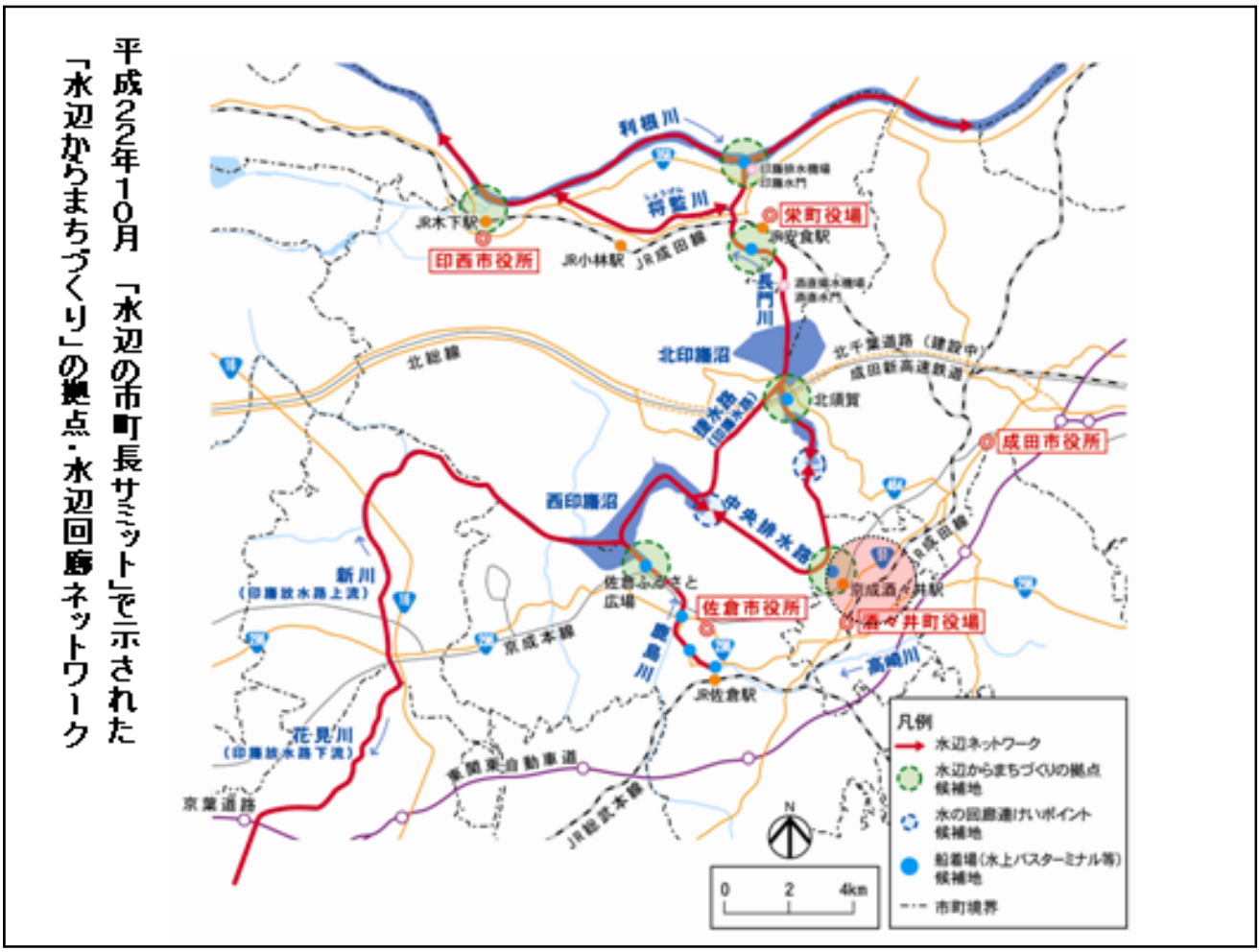
図８　印旛沼の変遷

１５００年以上の歴史が伝わる印旛沼ですが、１７世紀の江戸幕府による利根川付け替えに伴う土砂堆積、高度経済成長期の干拓により大きく姿を変え、現在に至ることになります。

鉄道の敷設により、水運から陸運（道路・鉄道輸送）に変化しました。



次に、「地域連携と自然再生による地域活性化」ということで、酒々井町だけではなく、近隣市町との水辺を利用したネットワークによる地域活性化構想についてお話をさせていただきます。



昨年、１０月に印旛沼に隣接する成田、佐倉、印西、栄、酒々井の首長が集まり、「地域の歴史と水辺からのまちづくり」について話し合いを行いましたが、この図はその時に示されたものです。

また、千葉県では、市町の印旛沼を中心とした広域連携による地域活性化「印旛沼流域圏地域再生協議会」の設置に向けた動きがあります。

この図を見ていただくとわかりますが、緑色の丸で囲まれた部分が「水辺からまちづくり拠点の候補地」です。佐倉市のふるさと広場、また成田市においては建設中の北千葉道路の道の駅、川の駅といった構想が進められています。また、青い●で示された船着場（水上バ

スターミナル）が整備されることにより、近隣との水辺ネットワーク（赤い矢印）が形成され、水の恵みを生かした地域振興、この地域全体の活性化につながるものと考えます。

そして、利根川、長門川によって、栄町や印西市と水のルートでつないで、しかも地域振興ができればいいと考えております。

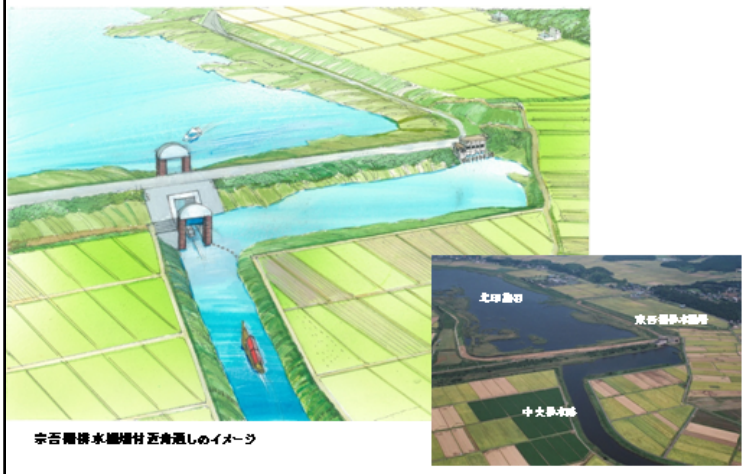
こうしたことについて、近隣と協力し国への働きかけ等を行っているところです。

なかでも、酒々井町の中平橋付近は、中央排水路のほぼ中央に位置し、京成酒々井駅やJR 酒々井駅へのアクセスを考慮しますと、非常に水辺のまちづくりの拠点としては魅力のある場所と考えています。

そこで、北印旛沼と西印旛沼に舟通しを設け、平常時は舟運拠点を結ぶネットワーク、非常時には低地排水路周辺は、約１，０００万ｔの容量を備えており、重要な地域であります。

３月１１日の東日本大震災では、印旛沼の堤防が亀裂や沈下を起こし、治水利用の容量が大幅に減となりました。⇒機能低下⇒水害の危険性の増大⇒適切な氾濫原管理が望まれます。

「中央排水路の舟通しのイメージ」Ⅰ

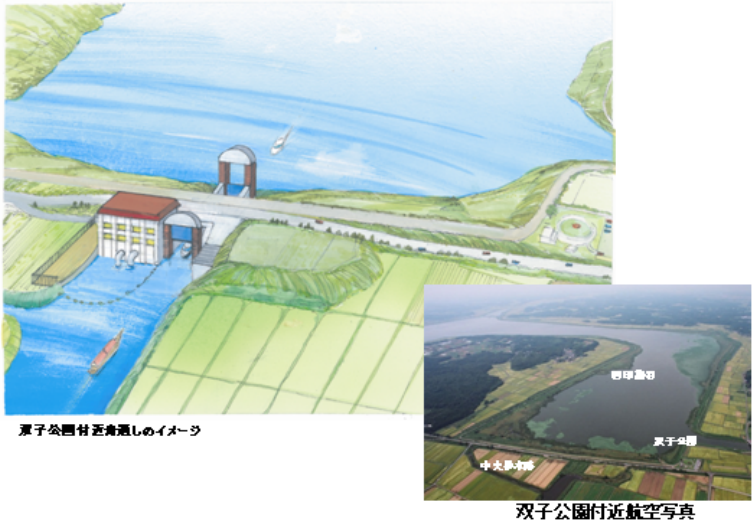


宗吾揚排水機場付近航空写真

これは、中央排水路の舟通しのイメージです。

中央排水路は昔は印旛沼でしたが、これは、成田側、宗吾揚排水機場付近の舟通しのイメージです。

「中央排水路の舟通しのイメージ」Ⅱ



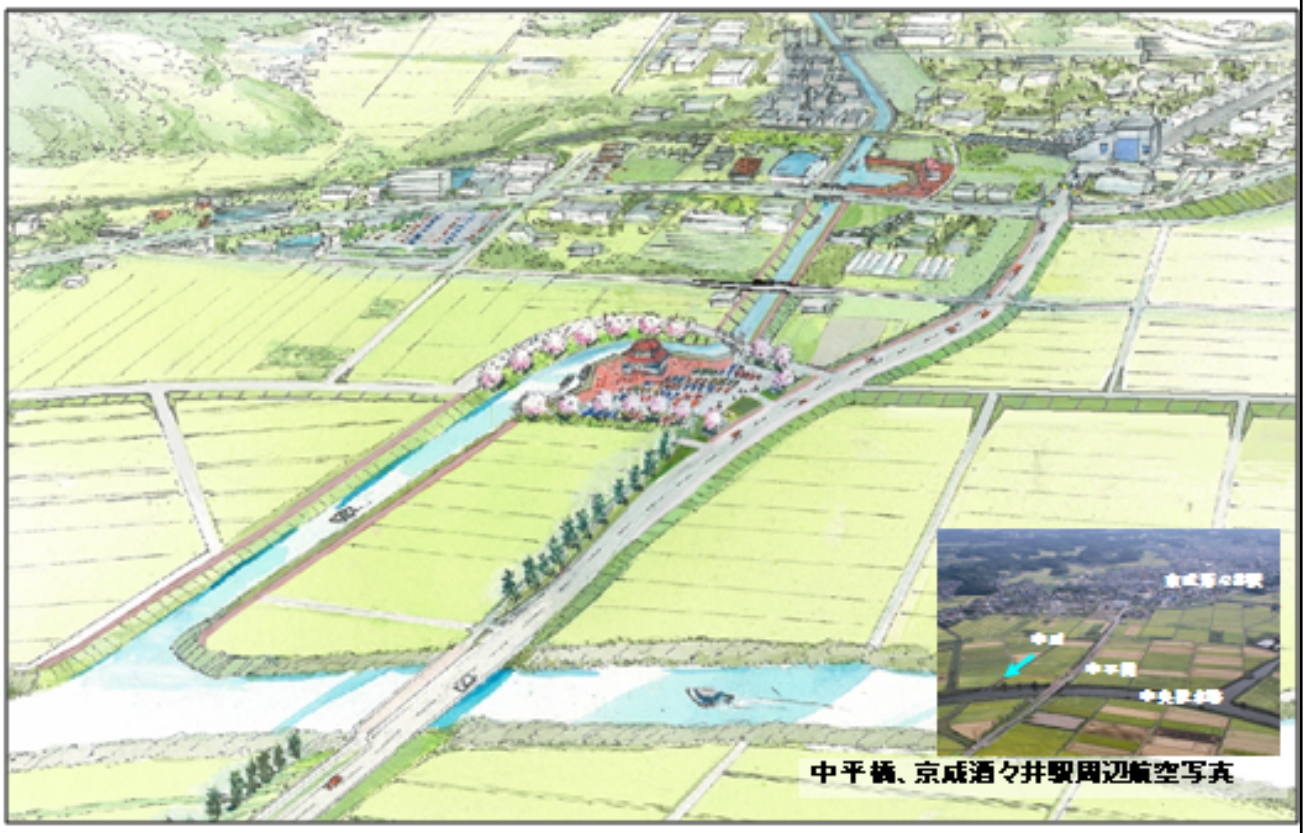
双子公園付近航空写真

これは、佐倉市側　西印旛沼と中央排水路の舟通しのイメージです。

右の公園が双子公園となっています。

また、舟通しに隣接の機場は、国営印旛沼Ⅱ期土地改良事業でつくられる揚排水機場です。

酒々井町「中平橋、京成酒々井駅周辺」のイメージ



そして、これが、酒々井町の中平橋付近のイメージ図となります。

水上バスターミナルが中央付近、右上に京成酒々井駅が描かれていますが、ボートであるとか、いろいろなものができるような将来構想を描いております。

先ほど申し上げましたとおり、駅からはすぐそばでございます。そこに船溜まりのようなところを作って、水と水辺も私たちの手にしていきたいと考えています。

そして、このように地域を連携する中で、水質浄化に役立つ役割を住民とともに考えていきたいと思っております。

私どもが小さな時は、この印旛沼、まさにこの沼の地域に来てよく遊びました。泳いだり、大きなカラス貝を取ってみたりして、沼と一体であったわけですが、是非とも地域の活性化と沼の自然再生をやっていきたいと考えています。

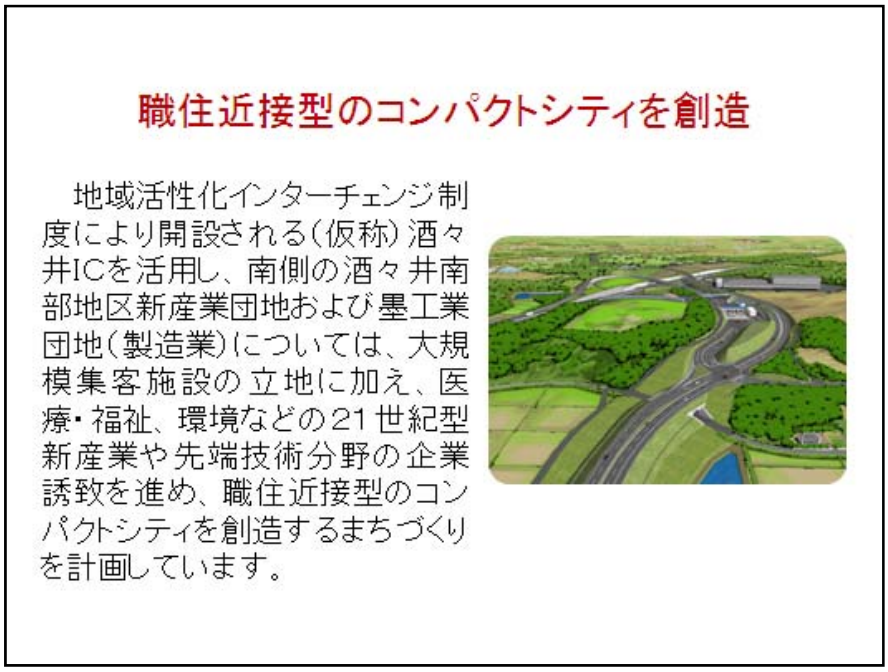
最後になりますが、酒々井町全体の未来の姿、思い描く将来像についてお話をさせていただきたいと思います。

皆様ご承知の方も多いとは存じますが、当町を縦断しております東関東自動車道に、新たに（仮称）酒々井インターチェンジが、開設される予定です。

このインターチェンジは、地域活性化インターとして、国土開発幹線自動車道建設会議で決定された後、平成１７年度から千葉県によりＩＣ及びアクセス道路整備事業が開始、平成２５年春の供用開始を目指して進められています。

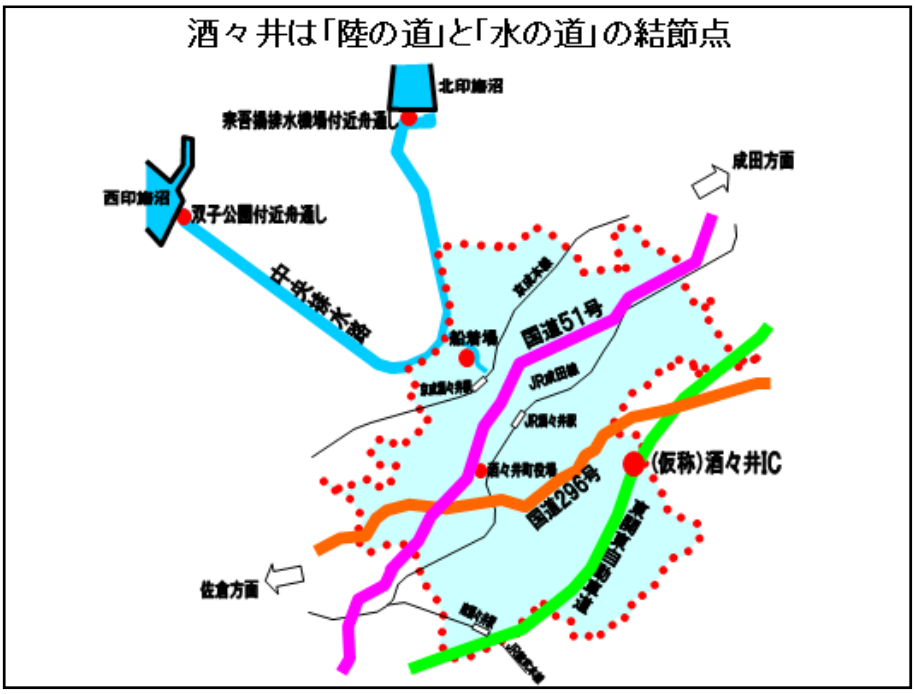
この酒々井インターチェンジを核とした企業誘致による産業振興は、町の自主財源の確保に不可欠であり、町のイメージアップにつながる確かな企業が多様な業種にわたり必要であると考えています。

このため、地域活性化インターチェンジ制度により開設される酒々井インターを活用し、南側の酒々井南部地区新産業団地については、大規模集客施設の立地に加え、医療・福祉、環境などの２１世紀型新産業や先端技術分野の企業誘致を進め、さらに、インター北側の地域については開発規制の緩和による沿道利用が可能となるよう計画しています。



このような考えのもと、職住近接型のコンパクトシティーを創造するまちづくりを計画しています。

もともと酒々井町には、２本の国道（R51・R296）と鉄道（JR・京成）が通っているわけですが、この IC が完成、供用開始をされることにより、高速道路、国道、鉄道、そして先ほどお話した水路を持つことになれば、酒々井町は、「陸の道」と「水の道」の結節点となります。

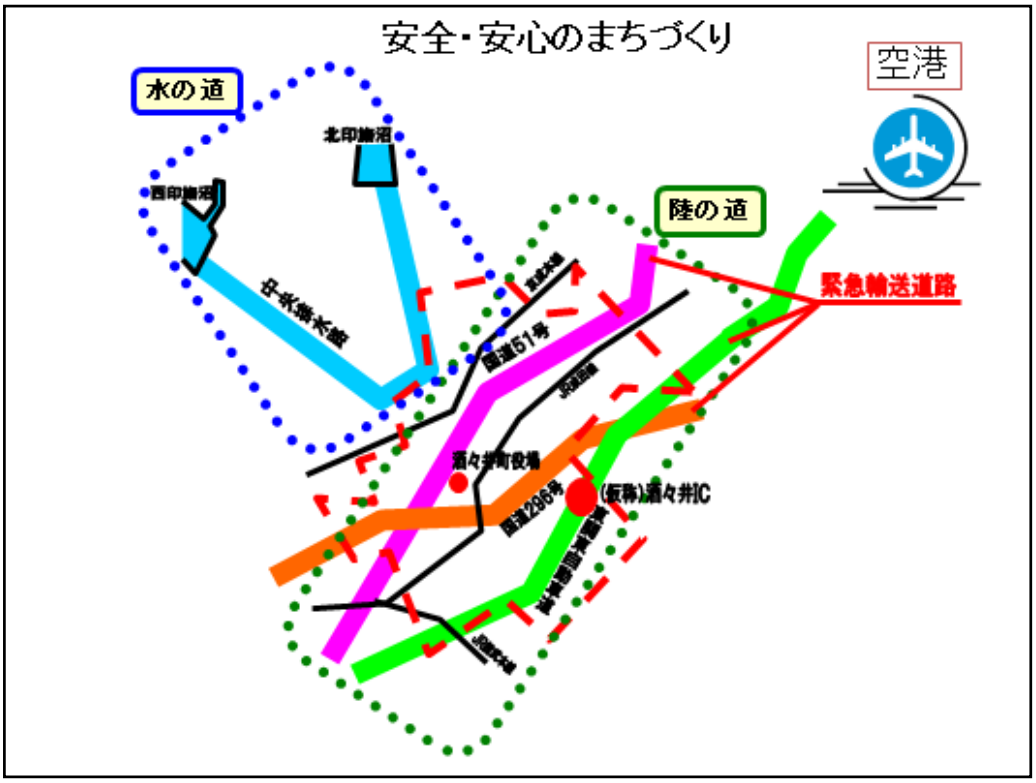


そして、この IC が完成することは、一般的な物流や産業振興といった意味の他に、実はもう一つ、酒々井町のまちづくりにおいて大きな役割を持つことになります。

それは、この IC が防災上において重要な施設になるということです。

本年、３月１１日の大震災においても、いち早く高速道路の復旧が行われ、まず緊急輸送路が確保されました。そうしたことから、この IC の開設によって東関東自動車道からの緊急輸送がいち早く可能となることが考えられます。

酒々井町は、既に学校施設の耐震化率　１００パーセントをいち早く達成し、他の公共施設の耐震化工事への取り組みも進めており、公共施設全体としては耐震化率は近々約８０パーセントになる見込みです。



そうしたことに加え、高速道路、国道、鉄道、そして水路による「陸の道」と「水の道」の結節点である酒々井町は、多様な緊急輸送経路を持ち、町民の皆さんにとって、さらに安全で、安心な町となります。

それでは、次にIC効果による地域活性化のキーとなる事業、施設をご紹介させていただきます。

先ず、酒々井南部地区新産業団地についてですが、これは、酒々井南部土地区画整理事業として、UR都市再生機構が施行者となり事業を進めているものであり、成田国際空港、酒々井ICに近接する立地条件を踏まえ、町の新たな観光・産業振興拠点として、複合型の新産業団地を目指しております。

また、成田空港との連携を進めることにより、地域の活性化や雇用の創出など、町内全域への経済波及効果や税収の増加による自主財源の安定確保に期待をしているところであります。

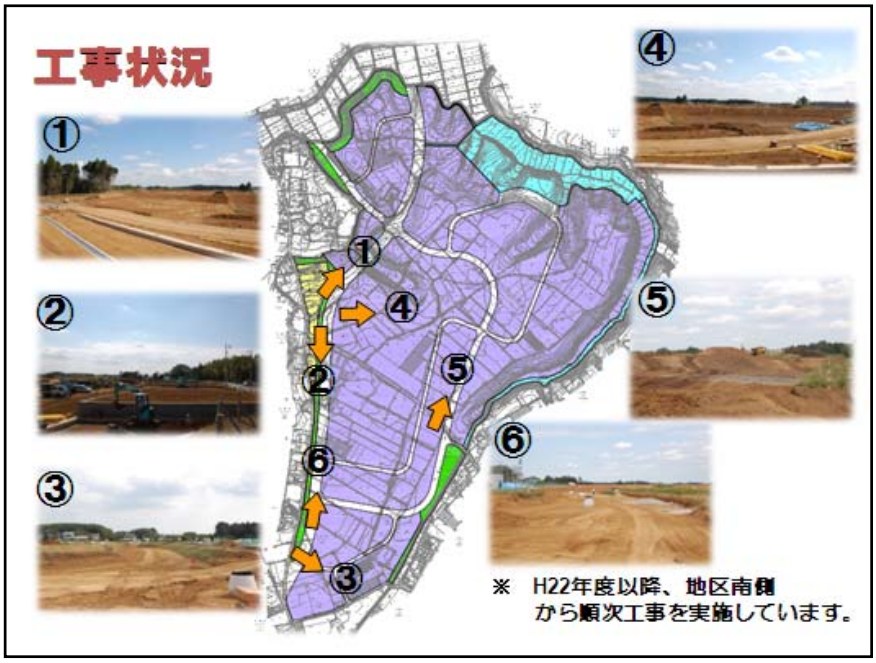
現在、計画建設用地内にチェルシージャパン㈱との間で賃貸借契約を締結し、平成２４年４月一部引き渡し、IC の完成と同時期の平成２５年春、施設開業を目指して進められています。

その面積は、土地区画整理事業の全体地区面積７１．１ha のうち、１９．８ha となります。

なお、チェルシージャパン㈱は、全国に８か所のプレミアム・アウトレットの開発・運営を行っている会社ですが、施設内容や規模等については、現在、計画中です。

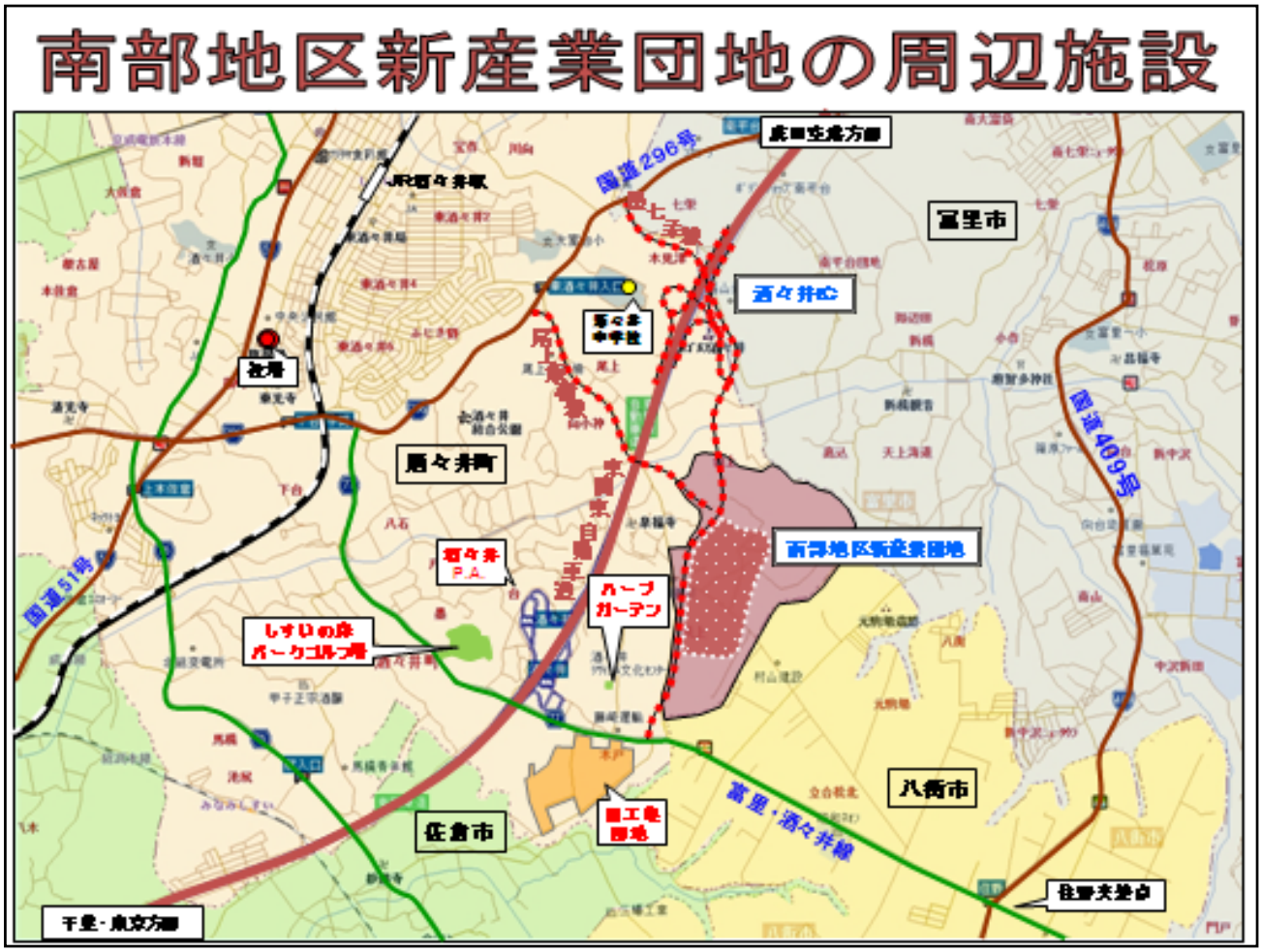
こちらが、現在の工事の状況です。

平成２２年度から、地区南側から順次工事を実施しています。



さらに、南部地区新産業団地周辺の施設について、簡単にご紹介させていただきます。

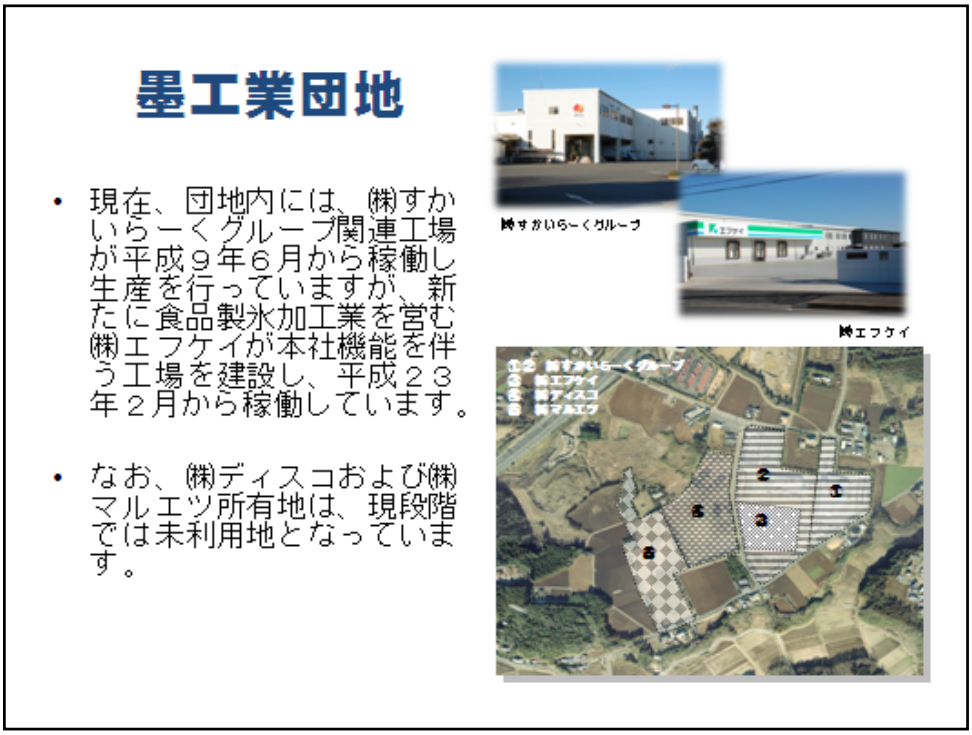
この図で申し上げますと、墨工業団地、酒々井パーキングエリア、しすいの森パークゴルフ場、しすいハーブガーデンといった施設がすぐ周辺にあります。



まず、墨工業団地については、現在、団地内には、㈱すかいらーくグループ関連工場が平成９年６月から稼働し生産を行っています。

また、新たに食品製氷加工業を営む(株)エフケイが本社機能を伴う工場を建設し、本年、平成２３年２月から稼働しています。

なお、㈱ディスコおよび㈱マルエツ所有地は、現段階では　未利用地となっていますが、IC 効果により、交通利便性が格段に向上することになりますので、今後の企業進出に期待をしております。



次に、墨工業団地のすぐ近くにあります酒々井パーキングエリアは、東関東自動車道のパーキングエリアの中では最大規模で、唯一ガソリンスタンドが設置され、サービスエリア並みの施設を有しています。

また、東関東自動車道には、サービスエリアが一ヶ所も存在しないため、事実上、東関道唯一のサービスエリアとして機能しています。

なお、今後は、地元農産物等の販売等を目的に、酒々井パーキングエリアのオープン化へ向け、ネクスコ東日本と協議を開始したところです。

次に、雪印種苗㈱が運営しています「しすいの森パークゴルフ場」は、4 万 6 千 m² の敷地に、36 ホールのコースを有し、首都圏最大の規模を誇っています。

北海道を発祥の地とするパークゴルフですが、今や全国に愛好者も広がり、町内はもちろん、遠方からも多くの来場者が訪れ、全国規模の大会も開催されています。

また、このパークゴルフ場のクラブハウスでは、地元酒々井町墨地区の野菜生産農家と提携し、採れたての季節野菜を毎日販売しています。豊富な種類と、新鮮で、安くて、安心なおいしい野菜が、お土産に、賞品に、夜食の献立にと、目的はそれぞれですが、女性に大人気となっています

なお、写真にありますように、昨年の９月、このしすいの森パークゴルフ場で行われました第１回パークゴルフ東京大会に、現内閣総理大臣、当時は財務大臣でありましたが、野田首相も来賓としてお見えになりました。

さらに、酒々井ハーブガーデンは、世界各地のハーブ１５０種類以上を植栽した本格的なハーブガーデンです。

春から秋にかけて、ガーデン内は季節のハーブが花盛りで、喫茶コーナーではハーブティーやランチを楽しむことができます。

以上、南部地区における一部施設をご紹介させていただきましたが、このような地域資源と交通利便性の良さを活用しつつ、町外から、あるいは外国からも多くの方々がこの酒々井町を訪れ、交流人口の増加による相乗効果が、南部地区からさらに町全体に活力と賑わいが生まれるようなまちづくりを進めていきたいと考えております。

もともとこの酒々井町は、水の美味しい、緑に囲まれた自然豊かな町です。

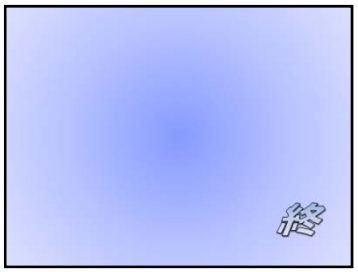
「酒々井町民歌」の歌詞には、「みどり明るく、水清く、印旛沼から光る風」と綴られております。　まさに、印旛沼が育んだ大いなる自然の恵みにより、酒々井町は水と緑の調和のとれた美しい町です。

それに加え、鉄道や道路による交通の利便性、上水道や下水道の普及率も高く、地域間格差のない優れた都市基盤を備えた、とても住みよい町です。

今後は、国指定史跡の本佐倉城跡など町の歴史的な文化遺産や自然環境など、まち独自の特性や強みを最大限に活かしながら、「町の顔づくり」を行い、町内外に酒々井町を PR していきたいと考えます。

そして、生活機能の整った、歩いて暮らせる成熟した「まち」、子どもから高齢者まで、すべての人たちがいきいきと安心して暮らせる「コンパクトシティ酒々井」を目指した取り組みを推進していきます。

遥か昔から陸路と水路の結節点として多くの人や文化が行きかったこの地は、空港との連結により、交通の要衝としてさらに地の利を得ることになりますので、今、そしてこれからも「人　自然　歴史が調和した活力あふれるまち　酒々井」となるよう努めてまいりたいと、改めてここに、いにしえの歴史を振り返りつつ思う訳であります。

平成２３年１０月１５日

酒々井町長　小　坂　泰　久